The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Lisa Yoneyama, ”Hiroshima Traces : Time, Space, and the Dialectics of Memory”, Berkeley, University of California Press, 1999
Author(s)	山崎, 吾郎
Citation	年報人間科学. 2003, 24-1, p. 119-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12524
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

◇書　評◇

Lisa Yoneyama,

Hiroshima Traces: Time, Space, and the Dialectics of Memory

Berkeley,
University of California Press, 1999.

山崎吾郎

I

本書は、アメリカで活躍する人類学者リサ・ヨネヤマによる、ヒロシマの過去の痕跡を描く民族誌である。今日、ヒロシマについて私たちが手に入れることのできる過去は、どのような歴史の軌跡が作り出したものであるのか、またヒロシマの記憶は戦後の世界をどのように形づくっているのか。その解明が、本書に収められた六つの章において一貫して論じられるテーマである。

「ヒロシマの過去の痕跡を描くこと」は、単にヒロシマの歴史を描くということではない。むしろ、痕跡（traces）という言葉に込められた独特の意味は、本書を特徴づけるとともに、重要な概念として「記憶」を提示しているといえるだろう。

本書のタイトルに示されているのは、記憶の中に存在する過去の痕跡は断片であり、かつまた多層な構造を持つものであるという、過去についての著者の認識である。こうした認識において著者は記憶と歴史を対立的にとらえているわけではないが、記憶という概念を用いることで次のことが強調されている。すなわち「過去が表象以前に内在的・決定的意味を持っているのではなく、どのような歴史的現実も、与えられた表象のカテゴリーや意味生成作用による媒介や再構築なしには入手可能でない」[1]。

このような著者の記憶観は、欧米の記憶の理論によるところが大きい。とりわけ、アドルノ、ベンヤミン、そしてフーコーの業績が直接・間接に参照され、本書に興味深い論点と理論的骨格をもたら

している。そしてまた、著者の強調する記憶の領域横断的な研究にとっても、こうした幅広い研究成果の参照が本書の議論を魅力的なものにする理由のひとつになっているといえる。以下に、本書の内容を概観しながらいくつかの興味深い論点を検討してみたい。

Ⅱ

本書は三つの部分に分かれ、それぞれ関連づけられた六つの章から構成されている。

第一部に収められているのは、第一章"Taming the Memoryscape"および第二章"Memories in Ruins"である。ここでは記憶の地図作成という主題が論じられる。最近二十年間に広島市が過去と向き合う中で取ってきた空間についての戦略を取り上げ、都市の再開発や観光計画がヒロシマの過去についての言説を正当化し、固定してきたことが明らかになる。

とりわけ第一章では、都市景観の再構成が、ヒロシマの歴史と社会に新しい知識や意識をもたらす点が考察される。過去を忘れることへの戒めと同時に、ヒロシマが「死の場所」から回復し、「明るい」イメージを切望していること。それは都市空間の再構成計画に織り込まれ、平和と繁栄を象徴する主題を作り出していく。しかし空間のもつ力は、私たちに物事のある側面を見せると同時に、また隠蔽する作用をももたらすのである。空間は、誰の経験が、いつ、どこで、どのようにして思い出されるべきなのかを規定することで、記憶することの適切な範囲を決めているのだと著者は論ずる。

第二章では原爆による崩壊を免れた建物のうち、数十年の間さまざまな形態で保存されてきた三つの建造物の保存運動に焦点が当てられる。壊れかけた建物や薄汚れた建造物がわれわれに伝えるメッセージやイメージ、また、原爆の被害をかろうじて免れた建物を保存しようとする努力の中には、矛盾した意識をうかがうことができるという。一方では、過去をありありと保存したいという願望。そしてまた一方で、その過去をいわば払拭するようにして明るいイメージを描こうとする都市計画。建築物の保存運動は、過去の「過去性（pastness）」が認識されるさまざまな方法を示しているのである。

次に、第二部には第三章"On Testimonial Practices"と第四章"Mnemonic Detour"が収められ、ここではヒロシマの原爆被害における生存者の証言活動が分析される。自身の体験、人生経験を公に語る彼らの活動は、過去への案内人として重要な役割を担っているといえるだろう。そのため、これまでにも多くの研究者がこれら被爆者の語りを社会的、歴史的、心理学的に考察してきたのだが、そうした研究は主として被爆体験の描写や被爆体験の心理的影響の分析であったと著者は述べる。それに対し本書では、生存者の証言活動の社会的広がりや、証言の寓意的に拡張された性格が考察され、これまでにない証言論が展開される。

第三章では、生存者にとっての「被爆者」というアイデンティティが、目撃者、語り部というアイデンティティを受け入れはじめることで複雑になっていく様子が、「被爆者」という制度やディスクー

ルの観点から分析される。ここでは原爆の直接体験が、個人の人生における孤独な体験としてではなく、社会に密接に埋め込まれた体験としてとらえなおしていく様が考察される。そしてその中で、証言が証言として過去の「真実」を語りうるようになる過程がとらえられる。

続く第四章では、証言者の語りが、物理的な都市計画だけでなく多方面にわたり同時に作用していくあり方が、五名の証言者の語りを用いて提示される。

第三部に収められた第五章 "Ethnic and Colonial Memories: The Korean Atom Bomb Memorial" と第六章 "Postwar Peace and the Feminization of Memory" では、想起という行為が戦後の世界情勢の中でどのような倫理、あるいはジェンダー化された身体を作り出すかという点が論じられる。

特に第五章では韓国に対する日本の植民地主義の記憶を再構築する最近の試みがとりあげられ、戦後日本でマイノリティであった在日韓国・朝鮮人のポストコロニアルにおける経験が考察される。著者によれば、韓国・朝鮮の犠牲者の碑は、これまで韓国・朝鮮人の集合表象として説明されてきた。したがって、想起という行為は、必然的に記憶の妥当性や所有者についての問題を含んでもいるのだ。第六章では、戦前と戦後の間に生じた変化と持続が記憶にもたらす影響に焦点があてられる。日本国家の公的な性格が、戦前の軍国主義から戦後の平和を愛する民主的国家へと変わっていったことは、しばしば男性的な勇敢さから女性的な無垢な国家への変容として描かれると著者はいう。では、戦後の政治制度における日本の女性像の再構築にともない、日本の女性が過去を想起する仕方はどのように変容していったのだろうか。著者は、少なくとも表象の領域では、ジェンダー、ネーションの主体としての日本の女性は十分に戦後の改革によって市民権を得たために、公的に受け入れられ、目に見える形で政治の主体になることができたという。そして、それによって国家の性格も変化したのだという。個人の記憶はこうして集合的記憶、ひいては国家像までにもかかわってくる様子が描かれ、本書は締めくくられる。

Ⅲ

本書はそのタイトルに表れているとおり、ヒロシマの過去を、記憶の痕跡、それも記憶の断片という立場から描いているため、各章に関連があるとは言え、扱う対象はそれぞれ独立したものである。そのすべてを検討することはできないので、ここでは第二部、とりわけ第三章で述べられた、証言者という社会的アイデンティティが作り出す「真実」、過去についての「真実」の語られ方を取り上げて論じたい。

もちろん、第二部は本書の中でもとりわけ興味深い内容を含んでいると評者は考えている。というのも、「語り部」や「証言者」と呼ばれる人々は、今日ヒロシマの過去の痕跡を知ろうとするときに決定的に重要な役割を果たすであろうことは疑いないからだ。しかし、著者によって示されるのは、いわば証言者の語りが「真実」になる

のはいかなる権力関係においてなのか、という問いかけである。こうした問いは、これまで証言というものがもっていた前提をひっくり返すような刺激的な論点を含んでいる。直接体験者の証言というのは学問的にも第一次資料として、また人類学という学問においても聞き取りから得られた情報というのは基本的なデータとして、そこから多くの重要な成果が生み出されてきた。それだけに、ここでの問いは知の基盤それ自体を問い直すラディカルな視点となっているように思う。ヒロシマの過去について「真実」を語るということは、どのようなことなのか。そこに証言者という社会的アイデンティティ、また聞くものと語るものの共犯関係が深く関与していることを著者は鋭く論じている。

ここで三点ほど評者の考えを述べたい。まず一点目は、こうした議論が歴史相対主義への危険を同時に含んでいるのではないかということ。なるほど著者自身も歴史的事実が存在しないわけではないという断りをした上で議論を積み重ねてはいる。だが、過去についての語りのアレゴリー性を問題にしたり、その社会的に構築されているという側面を積極的に描くという手法の中には、最終的にそれらを「政治」の問題に回収するにはあまりに大きな問題が残されている。そして同時にそこには、歴史的事実と著者が呼ぶものの定義の曖昧さ、さらには直接体験や出来事についての考察の弱さもあるのではないか。

もちろん、それが本書の欠点であるというつもりはない。だが、簡単な断り以上には過去の実在性に触れない議論や、最終的に何人の証言者の語りを参照したのかというデータが書き込まれていないために、本書が描く歴史の中には目的論的な性格が介入しているのではないかという疑いを抱く。過去の実在性についての哲学的な難題を背負ったまま、それに折り合いをつけることなく、権力関係から歴史の「真実」を語るだけでは、根本的な問題は残されたままであろう。

二点目は、証言者の語る「真実」について論じる中で、「客観性」のひとつの指標として原爆手帳についての記述を取り上げるべきではないかという点だ。証言者というカテゴリーにとって決定的に重要な事実のひとつは、いわゆる原爆手帳の存在である。被爆時の状況によって第一号から第四号までに分類されて配られるこの手帳の存在は、誰が被爆者であるかを「客観的に」示す重要な指標として機能している。そして、この「客観的な分類」は、誰が語る権利をもった人間であるかを、統計を駆使した社会政策によって管理し、そこで作られた語りをわれわれが聞くという構図を再生産する権力そのものである。それはもちろん被爆者というアイデンティティがカテゴリー化されていく構造でもあるだろう。本書ではむしろ、個人の体験の受け入れ方、体験を語るという行為のもたらす意味の分析を通じて「真実」が語られる過程を描いているが、原爆手帳の存在は被爆者のアイデンティティ形成のみならず、被爆経験の認定書として、経験の構築にも決定的な役目を果たしている。

しかし、いずれにせよ大事なのは「被爆者」というカテゴリーがさまざまな文脈の中で具体化し演じられてゆく際の社会的機能であ

る。科学的言説の作られ方の中にこそ、ヒロシマの過去について「真実」を語る構造が隠されている。その指摘はきわめて重要な本書の功績であるといえるだろう。

最後に三点目として、記憶についての議論が本書で触れられた論点以外にもさまざまに応用可能であることを述べたい。過去について「真実」が語られる際の語り口には、本書で触れられたトピック以外にもさまざまな論点がありうるだろう。たとえば、一度も広島の地を訪れたことのない人間にとって、ヒロシマの過去について知りうることのすべては、いうまでもなくメディアが伝える報道、映画に描かれるヒロシマ像、絵の中にあらわれる原爆像、文学の中に描かれるヒロシマの惨状、そしてもちろん学問研究の成果として描かれるヒロシマの歴史といったものである。こうしたさまざまなメディアがわれわれに伝える原爆像の中にも、今日ヒロシマの過去を考える際に強力にその「過去性」を作り上げているような権力が潜在していることを私たちは容易に想像することができるだろう。

Ⅳ

著者自身が強調するように、記憶の研究というのは多分野にまたがる研究領域である。したがって、本書の中にも文学理論から歴史哲学、フェミニズムといった様々な分野の研究成果が参照され、議論の中に生かされている。だが、こうした理論が本書の性格をかなりの部分で色づけているだけに、記憶という概念自体の検討が積極的に取り上げられないことを残念に思う。そしてそれは、先に述べたような歴史的事実や出来事、直接体験をより精緻に定義していく際のアキレス腱になっているようにも思う。もちろん本書はあくまで民族誌として書かれたものであることを考えれば、それはないものねだりなのかもしれない。むしろ今後の研究の道筋として受けとめるべきだろうか。しかしいずれにせよ、本書につづく記憶、あるいは集合的記憶に関する研究にとって、記憶という概念自体の検討をすることは十分に有益なことだろう。

註

(1) ヨネヤマ・リサ「記憶の弁証法——広島」、『思想』一九九九年、八六六号、五-二九頁。